



地球温暖化問題

別府市医師会 松本重孝

2019年10月12日に日本列島に上陸した台風19号により、関東、甲信、東北地方などで記録的な大雨が降り、甚大な被害をもたらした。この台風では、海面水温が高い海域を進んだことにより勢力が急激に増す「急速強化」と呼ばれる現象が起きた。台風の大型化は明らかに地球温暖化と関係がある。オーストラリアでは大規模な森林火災が延々と続き、北極では海水流出が止まらない。

地球環境の悪化、温暖化の問題はいよいよ現実の脅威となって迫ってきた。

1万年前に地球の人口は100万人しかいなかった。200年前には10億人になり、60年前の1960年には30億人になった。現在は70億人の人口がある。そして、今世紀の終わりには、少なくとも100億人に達すると見込まれている。

人口がここまで増えたのは、農業革命、科学革命、産業革命、公衆衛生革命による。人口が増え続けるとともに、水と食料への需要が増える。食料への需要が増えると、より多くの土地が必要になって、森林伐採が進む。食料への需要が増えると、食料の生産と輸送も増加する。そのすべてが、エネルギーへの需要を増加させる。それが温室効果ガスを増加させ、その結果、気候変動が一段と加速する。(参考：S・エモット著・世界がもし100億人になったなら)

地球が支えられる人口に限りがあることは明らかである。その限度は何人なのか。人工光合成(地球を救う技術である)の研究者であるエモット氏は、すでに限度を超えていると述べている。

世界中で異常気象が観測され、地球環境が制御不能な状態に陥りかけている。本来はどうしたら環境の悪化を食い止められるかを、各国が一丸となって考え、行動すべき事態である。地球が住めない状態になろうとしているのに、目先の利害について争っているのは愚かなことだ。

しかし、対策は遅々として進まない。地球温暖化というfact自体を認めようとしない人物が超大国の大統領の座にあるのが現実であり、このままでは、IPCCを中心に世界で合意された政治目標である「世界の平均気温の上昇を2℃以内に抑える」という目標は達成できそうにない。

平均気温が4-6℃上昇すると、想像を超えた大災害、飢饉、陸地の大規模な水没^(*)が起こる。果ては食料や水、陸地の不足に起因する戦争も起こり、将来のどこかの時点で人口が大幅に減って温暖化も止まる時が来るのかもしれない。カオスと呼ぶべき気候を示す地球上で、生き残った少数の人類が、現在と全く異なる新たな人類史を刻んでいくのだろうか。そのとき人類は農耕を食料調達の主な手段とすることはできないはずだ。(参考：中川毅 人類と気候の10万年史)

妻には「考えてもどうにもできないことを考えてもしょうがないでしょう」と叱られながらも、最近の私はこの問題について学び、考えることをやめることができないでいる。

*今のペースで温暖化が進めば、Bangladeshは今世紀末に水面下に消える。(エモットの著書による)



令和の御代に考えたこと

別府市医師会 安部 康二

昨年元号が平成から令和に変わりました。自分が経験する二回目の改元です。前回の昭和から平成に変わる時、自分はまだ医師になって三年目でようやく肝臓の研究班に所属したばかりでした。昭和63年の秋ごろから昭和天皇のご病状がニュース速報で流れ、世の中が自粛ムードに覆われていました。このころ非A非B型肝炎と言われていた輸血後肝炎の原因ウイルスが判明し、安全な輸血に役立っているという情報が研究室に流れました。そして昭和64年が明けて間もない1月7日の朝、出勤の準備をしている時にテレビで崩御が公表され、昭和が幕を閉じました。

この時昭和生まれの自分は初めて元号が変わる瞬間を経験したのですが、年号や干支について興味があった私は、この昭和から平成に時代が変わった時にあることに気付きました。昭和2年から昭和63年は通常、年間365日で構成されているのに、昭和元年と昭和64年はともにちょうど7日間しかないということです。その短い7日間を含めた昭和の期間は元号の中でも最長で、日数をエクセルで計算したところ22,660日でした。そして昭和を前後半に分けると、昭和の前半は昭和33年の大晦日までで、昭和34年の元日から後半になることが分かりました。

医師生活の大半を平成で過ごしましたが、昭和の頃と医療も様変わりしています。先の非A非B型肝炎はC型肝炎ウイルスと判明し、大学病院勤務時代は多くの症例にインターフェロンを注射する治療を行いました。一定の効果はあったものの副作用のために使用できない例も多くありました。今では直接作用型抗ウイルス薬(DAA)を用いて経口で安全に治療ができるようになっています。他にも内科領域だけでもヘリコバクタピロリの除菌で胃潰瘍は完治が期待できるようになり、喘息治療でも吸入ステロイド薬を用いて、気道のリモデリングを抑制し、難治化を予防できるようになりました。このように平成の時代には医学の発展が多く認められましたが、新型コロナウイルスによる肺炎が拡大しているように、新たな課題も発生しています。今後も個人としても知識の更新は欠かせません。

令和の幕開けは平成の時と違って祝賀ムードの中で行われ、自分も時代が変わる空気感を確かめに、連休を利用し皇居の外周を訪ねてお祝いしてきました。

令和の御代が大分県医師会員の皆様にとって素晴らしいものであることを願ってやみません。

乳鉢



エル・トポからイマジンへ

別府市医師会 垣迫 真一

弱者は救われない存在なのか？ ホドロフスキー監督のカルト的な名作映画、「エル・トポ」主人公が卑怯な殺人の罪を悔い、教祖としてよみがえり、障がい者を救うために皆で行進するが、為政者に騙され、皆ことごとく惨殺されてしまう。園子温監督の、「ヒミズ」どうしようもない父親と虐待されるその子供、最後に父は子供から殺害されるのだが、弱者が弱者を差別、虐待する内容、今の世相も反映される内容。貧困者はより弱い立場の生保の人を批判、攻撃、ネトウヨは本来批判すべき対象をはき違え、より無力な対象へと向ける。弱者は互いにいたわり、協力すべきなのに。真の敵は、本能寺ではないが、別の場所に。為政者は、マスコミ、企業を通じ、そのような勢力を利用、国民の意見を自分たちのいいように仕向けている。ノミの心臓以下の持主、シンゾー君よ。

世紀末の作曲家、マーラーの曲をしばし楽しむ。歌曲集「子供の不思議な角笛」、伝説、死と男女の愛、戦争の風景が描かれる。その中の曲、「惨殺された鼓手、少年鼓笛兵」、戦争の舞台、死の間際にも、過去の平和な情景、昔の恋人の幻影が交錯。そして、旧陸軍の上層部の腐敗ぶりを描いた、野間宏「真空地帯」、戦地に送られる絶望的な空間で、主人公の昔の故郷の風景、恋人との何気ないが、平和な会話がよみがえる。その対比の無残さ。戦争とは、最もこの世の中の不条理を表す出来事では。

世紀末は過ぎたが、今はいい時代ではない。君の好きなロックの話でも、いつそのことアナーキーの世の中にでも。1970年代、パンク・ロックのセックス・ピストルズ、「アナーキー・イン・UK」、
「アナーキズムをイギリスに、きつといつかそんな時がくる。思いどおりにやってやる。」誰もが独裁者を目指せば、全く無秩序、独裁者もいなくなる、これがマルキ・ド・サドの唱えた、逆ユートピア、しかし、究極のユートピア。でも、こんな世の中でも、ジョン・レノンの「イマジン」を想う。「国なんか無いと思ってごらん。人は僕を空想家という。けれどそれは僕一人ではない。」平和を願う人は多いだろう。「パワー・トゥ・ザ・ピープル」で。先日、フランシスコ教皇の演説もあった。人々の連帯を信じて。

乳鉢



整骨院でのマッサージは180円!?

別府市医師会 諫 山 哲 郎

最近、整骨院と名のる施術所が町のあちこちに出来ているのを目にします。一般の人は「ホネを矯正するところだろう」と認識するのが普通でしょう。看板には「肩こり、腰痛、O脚矯正、小顔矯正、各種保険適応、交通事故専門などキャッチーな広告も目に付きます。特に「肩もみ20分で180円」等の看板を見ると「怪しい!」とは思っても、思わず「安い! 試しに入ってみようか」という誘惑に駆られるでしょう。

整骨院（柔道整復）が増えてきた理由は、平成10年6月29日の福岡地裁判決で、柔道整復師養成施設新設が認められたことに原因があり、養成校の定員は平成10年の1,050人に対し平成27年では8,797人と増加し、卒後数年で開業しますので町中でとても目立つ結果となっているわけです。

保険がきくといっても「打撲及び捻挫もしくは骨折、脱臼の応急処置」だけです。看板記載の肩こりなどは自費というわけですが、一般の人は肩こり腰痛も保険がきくと誤解してしまいます。はたして整骨院では、打撲捻挫だけ保険請求しているのでしょうか？ 傷害部位が増える毎に倍々に請求額が増しますので、腰痛で受療してもいつのまにか、「肩が凝ってますね」「膝も捻ったんじゃないですか」などいわれ、あちこち揉んでもらって1割負担で「300円也」ということになります。3受傷部位から受傷機転を支給申請書（いわゆるレセプト）に記載する必要がありますから、「頸椎捻挫:朝起きようとしたら首を捻挫した。」「腰椎捻挫:草刈りをしようとして斜面で腰を捻挫した」「手関節捻挫:胃が痛くて手に力が入り関節を捻挫した」「肩関節捻挫、肘関節捻挫:歯の治療中、痛くて椅子を握りしめ、腕を痛めた」などとあり得ない受傷機転のもと、合法的に保険請求が出来るわけです。

平成27年度の療養費（総額5,308億円）の内訳は、柔道整復3,789億円（71.5%）、あん摩マッサージ700億円（13.1%）です。ちなみに、外来医療費は平成26年度で内科40,701億円、整形外科9,001億円、眼科7,199億円、外科4,571億円、耳鼻科4,150億円、小児科3,408億円、皮膚科3,157億円、産婦人科2,475億円です。保険請求は打撲捻挫しか認められていない柔道整復の療養費は、なんと小児科、皮膚科、産婦人科より高額です。

平成31年から、整骨院と同様に「あん摩マッサージ」にも受療委任払い（医科の健康保険に似た制度）が認められました。あん摩マッサージの場合は保険者裁量により認めないということも出来ますので、賢明な大分県医師国保では認めないと規定されました。認めた場合は施術者のいいなりに療養費を支払うことになります。他保険者ですが過去には訪問マッサージに月7万円が数ヶ月以上にわたって支払われていたこともあります。

療養費は不正請求の温床と考えられますので、「どげんかせないかん!」と整形外科学会を中心に頑張っていますが、いかんせん学術団体がいくら不正をただそうと行政に訴えても、頑としてはねつける政治家を官僚が忖度してこの制度が続いているのは、はがゆいばかりです。また血圧が上がったようですので、筆をここで置くことにします。



医師9年目を迎えて

佐伯市医師会(豊後大野市民病院 整形外科勤務)

曾根 崇史

佐伯中央病院の小寺隆三先生にバトンを受け取る形で今回執筆の機会を頂きました整形外科の曾根崇史と申します。父親は佐伯市で開業しており私はそこを引き継いで存続・発展させるのが使命といえます。今回同じ医局の先輩である小寺先生に急にこのお話を頂き、医師会へも入っていなかったのでバタバタと入会し執筆するに至ってます。私は現在医師9年目で整形外科7年目で豊後大野市民病院で勤務医として勤務しております。なんとか専門医に合格してすぐという時期です。医局人事で豊後大野と言われたときは田舎に行きたくないという気持ちがありましたが現在はとても充実した日々を過ごしております。人口の半が高齢者という地域なので病人は多く特に整形外科の症例は多いように感じます。200床程度の病院で8割程度の稼働ですが60～70人くらいは常に整形外科の入院患者がいます。正直整形外科が一番忙しい病院で心にあまり余裕は持てません。常勤医は20人ほどですが非常勤もいてかなりの科が揃っており、コンサルトするときも困りません。今までいくつかの病院で研修を受けてきましたが、自分の能力不足や上司や同僚の存在もあり手術を多くやる機会がなく実力不足を痛感しており、将来への不安が常に付きまといました。今は部長と二人体制で自分の受け持ち入院患者数は常に40人以上いて週4回の外来も毎回40人前後と多く、忙しいとストレスを感じることは多々ありますがその分多くの手術を執刀させてもらっており、手厚く指導してくださる上司にはいつも感謝してます。症例も非常に幅広くて数も多く、手術日は週3日ですが週に5～8例くらいは手術があります。医局には勉強するには十分な書籍が揃っており予習がしたいときにも困ることはありません。肩や足の関節鏡や皮弁など経験がなかったこともやる機会があり貴重な経験となっています。

1年後か2年後に佐伯で病院をやっていかなければならない身としては、今の経験はとても貴重で有難く感じています。外科医はどこかで多く執刀する時期がないと自信がつかないものだと感じています。

田舎で食事する場所にも困るような所ですが、研修するにはとても良い場所だと感じている今日この頃です。慣れない執筆で近況報告ばかりになってしまいましたが医師会の皆様、今後とも宜しくお願いいたします。

乳鉢

国木田独歩と佐伯

佐伯市医師会 小寺隆三

佐伯生まれ、佐伯育ちの自分ではありますが、佐伯にゆかりのある国木田独歩についてあまり知らなかったので、少し調べてみました。

国木田独歩は明治26年(1893年)、佐伯町鶴谷学館教師(教頭職)として、弟と共に来佐しました。後に、明治を代表する文豪として評される人物です。佐伯滞在はわずかに10ヶ月でしたが、尺間山、彦山、元越山(もとごえさん)などの山々に登りました。なかでも彼が最も愛し、何度も登ったのが城山でした。その様子が、彼の日記「欺かざるの記」にくわしく記されています。城山の山頂には「独歩の碑」が建てられています。

佐伯滞在の経験は、後に彼が表す作品に大きな影響を与えることとなり、「春の鳥」「源おぢ」「鹿狩」など、佐伯を舞台とする作品として結実しました。佐伯を離れた独歩はその後「武蔵野」という有名な作品を残し、37歳という短い一生を終えました。

佐伯市城下東町に国木田独歩の記念館である「城下町佐伯 国木田独歩館」があります。明治26年(1893年)10月から明治27年(1894年)7月末までのわずか10ヶ月間、当時22歳の国木田独歩と弟収二(15歳)が下宿した坂本永年邸です。坂本永年は、独歩が教師を務めた鶴谷学館の館長であり、公私ともに面倒をみていました。独歩は主屋2階に下宿。裏山にあたる城山の山上まで散歩することも多かったようです。当時の佐伯の人口は5,000人ほどの町でした。

このような佐伯と独歩のかかわりを、彼の過ごした坂本邸でご紹介するために建物を修復、「城下町佐伯 国木田独歩館」として公開することになりました。展示は大きく主屋と土蔵に分かれ、それぞれ1階と2階をご覧ください。坂本邸は幕末の頃に建築されており、すでに150年は経過しています。古い日本建築と城山を借景とした庭園の美しさをご覧ください。明治の若き文豪が過ごした佐伯の日々に想いを馳せるひとときを、お過ごし頂ければ幸いです。



リレー随筆

日常診療を支えることば



佐伯市医師会 上尾大輔

患者さんと向き合う毎日です。日常診療は単調なようで、決してそうではありません。疾患は分類できても、患者さんは一人ひとりです。毎日多くの方と対面するわけですから、そこには何かしらの出来事が生じます。患者さんとよいコミュニケーションを持ち、適切な治療やマネジメントができるように研鑽しなければと思っています。しかし、うまくいかずに頭を抱えるようなこともあります。その時、恩師の言葉が頭をよぎります。「診療に際しては、状態を虚心坦懐に見ること。そして自分にその病気がでたらどう感じるだろうか」と思いながら患者さんを診ること。」

柳田邦夫氏は「2.5人称の視点」という言葉を提唱しました。2.5人称とは、患者さんに共感しつつも、冷静さや客観的な判断を併せ持つということです。3人称だと客観的ではあっても気持ちの上で冷たくなるかもしれません、2人称だと思いが強くても感情移入により冷静さを失う可能性があるかもしれません。「2.5」の意味するところは、一見矛盾するようなことを同時に持ち合わせることでしょう。恩師の助言は2.5人称の視点に通じるものがあると思います。

最近、同じ開業医である親友が深刻な病気を発症しました。そのことを本人から直接聞いて、私は大きな衝撃を受けました。そして何かを求めるような気持ちで、柳田邦夫氏の「死の医学の序章」、西川喜作氏の「輝け我が命の日々よ」を立て続けに再読しました。西川氏は精神科医で、前立腺癌のために2年7か月の闘病の後、50歳で亡くなりました。その間多くの仕事をし、精神科医として自分を見つめた手記を書き、それは没後、「輝け我が命の日々よ」という一冊の本になりました。西川氏の死後、闘病の2年7か月は柳田氏司会のドキュメンタリー番組にまとめられ、テレビで放映されました。You Tubeで視聴できます。その後、さらに柳田氏は5年かけて考察を加えた「死の医学の序章」を執筆しました。この2冊には珠玉の言葉が溢れており、臨床医として悩み迷うことの多い私に、大きな励みを与えてくれます。

西川氏は、「死とはその人の人生が短期間にintegrate(集積)されて出てくるものではないか」(国立がんセンター杉村隆氏)という言葉に触発され、残された時間を以下のように使い分け実行しました。1) 医師として可能な限り学び続ける。2) 学んだことを患者の診療のなかで実践する。3) 自分の経験したことを発表して人に問う。

いつも立ち返りたい言葉です。

ふかしま やかたじま
深島と屋形島



佐伯市医師会 長 門 仁

私は佐伯市蒲江にある、へき地診療所の西野浦診療所、名護屋出張診療所に週1回出務している。へき地と言っても以前とは比べ物にならないほど道路事情がよくなっており、現在は佐伯市内から高速の東九州自動車道もしくは県道37号線を使えば30－40分程度で行ける場所となっている。

名護屋出張診療所から西野浦診療所までの移動には車で約20分を要すが、蒲江の海沿いの道路を走っていると、沖合に深島と屋形島の二つの島が見える。

深島は蒲江港から約9km南の沖合にある大分県最南端の島で人口は20名。そんな島に人口を大きく上回る100匹ほどの野生の猫が生息しており、最近は「猫の島」として有名になり、テレビでもよく取り上げられるようになってきている。島の猫には住民が名前を付けて餌やりや予防接種などお世話をしているそうで、その費用を捻出するために、佐伯市観光協会では2019年に島内の猫81匹の名前や写真を紹介する『深島ねこ図鑑2019』を作成し販売している。島には犬を飼ってはならないという言い伝えがあり、猫が増えたのはそのためであるとも言われている。

また、屋形島は蒲江港から約3km沖合にあり人口は16名。赤・紫・黄色・橙色といった鮮やかな殻が特徴の緋扇貝（ひおうぎがい）の養殖が盛んに行われている。緋扇貝は見た目はホタテで、佐伯に住んでいると食べる機会も多くある。今は慣れたが、最初に食べた時は色が鮮やかすぎて人工的に着色したものではないかと思い、やや抵抗もあったが（決して人工的な着色ではありません）、いざ食べてみると焼いても煮ても、どのように調理しても肉厚でおいしかった。

また食べた後も、色鮮やかな貝殻が工芸品や装飾品に利用できるとあって、インターネットなどで貝殻だけで取り引きもされている。

また、島の西側に細長く突き出た洲の鼻や深島との間にはテーブルサンゴが群生しており、スキューバダイビングやシュノーケリングといったレジャーを楽しむことができるとのこと。

今回、蒲江の深島と屋形島を紹介したが私はどちらの島にも行ったことはなく、いつか是非訪れてみたいと思っている。皆さんも佐伯方面にお越しになることがあれば蒲江の方まで足を伸ばしていただき、豊かな自然と触れあってみてください。

『深島ねこ図鑑2019』

1冊 1,200円（税別）。佐伯市役所や市観光案内所、市観光交流館などで購入できる。

問い合わせは市観光案内所（0972・23・3400）

乳鉢

執着駅



大分県医師会 尾崎 任 昭

健康作りで、ランニングを始めてから、かれこれ10年以上になる。

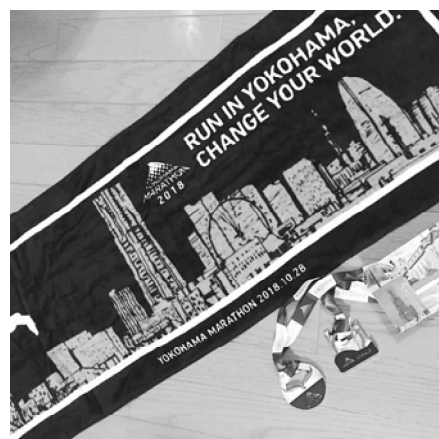
断っておくが、来年のオリンピック出場に向けてではない。月単位で約250Kmを走っている。こうした話をするとなんていはいは、優秀な記録の紹介になりそうであるが残念ながら、学生時代を通して決して成績優秀ではなく、いつも合格ラインすれすれで、あやうく落ちこぼれそうであった私には自慢できる記録は全くない。

さて、ランニングスケジュールは、GPS機能付きランニングウォッチで管理され、時間・キロ当たりのペースやコースがマップで確認できる。いつの頃だろうか？ 雨や研究会・会議などで、やむを得なく「走れない日」には、当然記録ができない。そんな「走れない日」があると、心の中に継続が途切れた事に対する「罪悪感」が生じ始めたのである。

庄内で代々医者の家系に生まれた私であるが、友人達からは、「一人っ子やし、甘やかされたお坊ちゃま」と、からかわれた事もあったが、両親と一緒に思い出した記憶は、皆無に等しい。父は多忙で、休日にも関わらず、往診へ出かけ、母も父の手伝いがない時は家事に追われており、もっぱら一人で過ごすことが多い日々であった。おりしもその頃「スーパーカーブーム」が始まった。ひとめぼれしていた、「トヨタ2000GT」のミニカーを買ってもらった時に、大喜びしたのを鮮明に覚えている。しかし、一台では、競争できないので満足できるはずもない。勉強のご褒美として、スーパーカーを1か月に1台ずつ揃えてコレクションを始めた。親からは、勉強という継続が途切れたら「スーパーカー」は手に入らなくなるのだと教えられた。そこから、「継続への執着」が芽生えたのかもしれない。

時は過ぎ、お師匠さまの有田眞先生のもとで、日々、研究に明け暮れた結果、「継続への執着」に磨きがかかった。いつしか「ご褒美」という対象ではなくなり、「自己満足」に変わっていった。その結果、継続が途切れた場合には、「罪悪感」が生じるようになったのだ。今では、日々の診療業務以外に、「論文抄読」「ランニング」「競技自転車」「弦楽器」等を毎日こなしている。更に今度は、「鍵盤楽器」の演奏が新たに加わることになった。初老になった私の「継続への執着」はどこまで続くのであろうか？ただ、ランニングに関しては「雨天用ポンチョ」導入後より、「継続への執着」が達成でき、みごとに「罪悪感」は消失した。

だが、今の様に仕事が多忙な時の趣味や娯楽は心の寛ぎを与えてくれるが、決してそれだけでは人を生かしてくれないのだろうと呟く今日この頃である。





帰る帰る詐欺

竹田市医師会 須 小 毅

現在、竹田市で耳鼻咽喉科医院を営んでおります。30年前までは祖父・父が同じ場所で耳鼻咽喉科医院を開業しておりました。父は私が中学生の時に亡くなり、その後は祖父が頑張っておりましたが、当院は私が医者になる3年ほど前に閉院となっておりました。

医者になってからは大分医科大学附属病院に12年、大分県立病院に12年間勤務させていただきました。

大学勤務時代には竹田市医師会の先生方に、いずれ竹田市で開業する意思はあるのかとご心配いただき、「いずれは必ず帰ります。」と即答しておりました。また、竹田市の患者さんと出会えば、「そのうち帰りますのでよろしくお願いしますね。」と宣伝しておりました。

その後の県立病院時代には竹田市の保険健康課の皆様に、積極的にアプローチいただきましたが、「そうですね。」「将来的には帰ろうと思っております。」など、なんだかいい加減な受け答えを延々と続けておりました。

更に、同郷の先輩耳鼻咽喉科医の島村康一郎先生には「須小がいるから竹田市での開業はやめよう。」とご忖度までもいただきました。

運よく大病院勤務を続けさせていただき、こんな私でもそれなりに頑張らせてもらっておりました。今、振り返ると若い時分にありがちな、高揚感（偉くなったような・できる男になったような気分）だったのかなと思います。

そんなこんなの大分県立病院勤務時代の2013年12月21日、竹田市からの要請で「大分県立病院健康教室 耳・はな・のどの病気あれこれ」の講演をさせていただきました。このお話をいただいた時に、喜んでお受け致しましたものの、本心は（遂に来たかと・・・）（この手で来たかと・・・）（参ったなあ、これは・・・）（もう流石に逃げることはできないか・・・）の心のつぶやき。

当日、カモネギの面持ちで向かった竹田市総合社会福祉センターはこれまた満員御礼。私のつまらない話終了後の質疑応答では、事前に十分練習していたのではないかと思うような「竹田市は長年、耳鼻咽喉科医院がなくて不便しております。是非、帰って来ていただきたい」の発言と大きな拍手。

という訳で齢50にして2016年4月1日に竹田市で耳鼻咽喉科医院を三代目として再開させていただきました。

今思うに、やっぱり帰って来て良かったなと。本来、家業を継ぐために医者になったのに何だかえらくのんびりしてしまったなと。

多くのお世話になった方々に感謝しつつ、大勢のご迷惑をおかけした皆様に本当に申し訳ねえと想いつつ、この先怪我も病気もしなければ、医者人生の折り返し。故郷の竹田市でどっぷり地域に密着して天命を全うしたいけれども三代目が身上を・・・とぼんやり考える今日この頃です。





原尻の滝

豊後大野市医師会 拜郷敦彦

豊後大野市緒方町には広い田園風景が見られる平野の中に、突然ともいえる地形の窪みがあり、ここに原尻の滝があります。観光で来られた先生方も多いと思います。緒方川の途中に幅120m、高さ20mの滝があり、本家とは比較にならないかも知れませんが、『東洋のナイアガラ』という別称まであります。

3年前に熊本・大分地震もありましたので、密かに『きっと原尻の滝あたりは未知の断層があるのでは?』と疑っておりました。こんな平野の中に突然の窪みがあることは、きっとその断層が大きく動くことがあるのではないかと、つまり直下型地震でも起きるのではないかと、無知な頭で漠然と恐れていました。私は豊後大野市民病院に赴任して（緒方町国保総合病院→公立おがた総合病院→豊後大野市民病院と改称）25年が経ちましたが、周囲から一度もそういう断層の話聞くことはありませんでした。それが最近になって、大分県姫島とここ豊後大野市がジオパークに認定されたことを知り、少し調べてみました。

それによりますと、9万年前に阿蘇山が大噴火を起こし、その4回目の破局的な噴火によって超巨大火砕流が発生したそうです。その火砕流がこの地域を埋め尽くして、その後の地形に大きな影響を与えたと記されています。原尻の滝は、そのマグマが急速に冷却され、いわゆる柱状節理と呼ばれる溶結凝灰岩が形成されました。そこに長い年月をかけて川の水流によって崩落してこの滝ができたとされています。ここから近い豊後大野市大野町を流れる大野川中流に、同じような原理でできたと考えられている沈墮（ちんだ）の滝があります。大野川中流にあるのは雄滝、その支流の平井川には雌滝とよばれる滝があります。いずれも溶岩が冷却されてできる柱状節理とよばれる六角形の独特な形をした柱がみられ、その景観は素晴らしいものがあります。そしてかつて（明治時代）沈墮の滝に水力発電所が作られ、当時の大分県府間の電気鉄道に供电されたという歴史もあります。

このような理由で、『原尻の滝＝断層』という私の稚拙な心配事は払拭されましたが、ただただその大元である阿蘇山が静かにしてくれることを祈るのみです。

この拙文に目を通していただいた先生方は、私のように地震を心配なさらずに、ぜひ原尻の滝、沈墮の滝の観光にお出かけ下さい。車で近くまで立ち寄ることができます。

リレー

家内との日々

豊後大野市医師会 宮 脇 貴 史

今日は原稿締切の前日、3月14日、ホワイトデーです。全くの私事で恐縮ですが、今年は30回目の結婚記念日を迎えますし、家内とのことを綴ることにしました。

栃木から卒業後に大分へ、その後も山香町、東京、姫島村、三重町と、転勤に伴う引っ越しに、家内は息子達とともにいつも一緒でした。20年前に三重町に自宅を構え、引っ越しをしなくなり、7年前には次男も進学して家を出ましたので、夫婦二人の落ち着いた生活です。といっても昼間は一緒に居ないので、診療が終わった後や、休日を二人で仲良く過ごしています。

自宅では夜7時頃から晩酌を始め、料理をとときには私も手伝い、9時半過ぎ頃までの夕食を、お酒を味わいながら、いろいろな話題で楽しんでいます。

二人で長く続けているのは、長男が小学校の頃にPTAで始めたミニバレーで、もう20年近くになります。最近、毎週木曜の夜に近所の体育館で1チーム4人のソフトバレーを、大会や試合には出ずに、ただ練習しています。

次男が通っていた県習字の書き方教室で、10年程前から二人でお稽古しています。硬筆から始め、その後、実用書（小筆）に取り組んでいます。十級から始まり二級まで、その後は一級の人・地・天、特級人・地・天とあり、やっと初段。七段まで上がると続いて八段人・地・天、準師範人・地・天の後、ようやく師範です。まだ続きがあり準同人、同人、準教士人・地・天を経て、最高位である教士へと34段階を昇格してたどり着きます。現在、家内は硬筆も実用書も準教士地なので最高位まであと2歩です。私も実用書は準教土地ですが、硬筆は同人に1年半ほど留まっています。実力の限界なのかもしれません。

春から秋にかけて、10月に催される行橋別府100キロウォークに向けた練習に二人で取り組みます。1時間に5キロほどの速さで、週1回の町内7.7キロや、月に1回は大分駅まで電車で出かけ、自宅までの42キロを8時間半ほどで歩いたり、60キロほどのコースを設定したりして長距離の練習に励みます。真っ暗な国道をヘッドライトの光を2つ並べて歩くのが大好きです。3年前に初参加し、夜も続く大雨・強風でリタイアしました。2年前は頑張って完歩したのに、夫婦で並んでゴールすることは叶わず（写真）、去年はなんと！、大会が中止になって叶わず。今秋の夢実現に向け、5月末頃から練習再開の予定です。

さて仕事も終わり。お花のブーケとシャンパンを買って、我が家に帰ります。

